

**中齋塾東京フォーラム**  
**平成 31 年度（令和元年）第 5 回講話**

平成 31 年 5 月 11 日  
於 湯島聖堂

最初から雑談します。吉良さんが先ほどの挨拶で談話と言った。でも中齋塾フォーラムは講話です。今回は元号に関し、安倍首相が今上天皇のところへ面会に行くという記事が何度かあった。この間、万葉集の専門家と話をした時に非常に怒っていた。面会という言葉が新聞が使うのはけしからん。面会というのは刑務所に入っている人物の所へ弁護士が出掛けて話をする。そういうときに使う。面談は会って語らいをする。だから面会という言葉が新聞で使ってほしくないねとありました。私の場合、講演会の依頼がくるのですが、講演という科白があまり好きじゃないので講話がよいと言っています。今回、元号が令和に代わりましたので、そういうことが氣になりました。

先月、東京フォーラム終了後に太宰府へ参りました。これは間に合ってよかった。太宰府に行って、太宰府天満宮に参拝をし、そのあとは令和ゆかりの地という坂本八幡宮に行きました。そこでは三通りの字の書体（令）を額に入れて観光客に見せていました。日本語って面白いですね。その後で太宰府天満宮で奉納吟詠をしました。その前夜祭で隣に座った人が、三重県の日本吟道奉賛会の本部長で三重県代表の人でした。伊勢神宮と縁が深い。それで伊勢神宮の話を色々してくれて、伊勢神宮の五十鈴川の話をしてくれました。鈴が神様をお迎えし、神様をお送りするという説明をしてくれました。その人は家業が呉服屋だったから、曾野綾子さんの話をちょっとしました。私の同期の万葉集研究家は四宮さんといいます。四宮さんが発行している『伝統と革新』という雑誌があり、その中に曾野綾子さんのインタビューがありました。曾野綾子さんは美智子さまとお会いすることがある。今は上皇后だけれども、その時は皇后です。皇后さまは蚕の面倒をみている。正倉院にある古代から伝わっている衣服の綻びを繕うのに、普通の蚕の糸では駄目だそうです。野生の蚕が吐いた糸でないと正倉院の衣服の綻びを繕うことができない。皇后様は野生の蚕がきちんと生きていけるように面倒を見ておられる。その糸でないと正倉院の衣服は繕えないということが載っていたので、そういう話をしたら話が弾みました。四宮さんなかなか良いインタビューするなと思いました。

今日の論語は、障害者には思いやりを持つべき。持つといいですねという内容です。五郎三郎先生に飛びますが、渡邊五郎三郎先生は 101 歳になられたかな。安岡正篤先生が、ただ一人だけ、生きていて、あの方は君士だといった人が渡邊五郎三郎先生です。先

生は背筋がぴんとしています。矍鑠としている。それがある日を境に急激に体が悪くなった。特に足が駄目になった。東日本大震災の時に新幹線に乗っていたら急停車。あと線路の上を30分以上歩かされた。線路の上をずっと歩かされたのが原因で足が一気に悪くなって、杖になって、車いすになったという。そういうチャンスが仮にあったらば、線路を歩けて言われたら、歩くのは嫌だって拒否しようと思った。人から言われて、自分ができるとしたらやればいいんだけども、これはちょっと止めたほうがいいねと思ったら、自分の直感を信じた方がよいと思います。

今日の論語の「師冕」という「冕」目の見えない人。このくだりを先程の話をしていて思い出した。忠久先生はだいぶ足が悪くなられて杖をついて歩くようになった。講堂の上をあがるのに階段があるのですが、だいぶ角度がある階段なものだからきついのでしょう。今は手すりが付いた。手すりがあると手すりに掴まって歩く。やっぱり、体の具合が悪くなったらば、どんどんまわりの設備を変えなきゃいけませんね。聖堂は少しずつ変えている。段々バリアフリーもいいですね。バリアフリーが必要になると思う。障害者に優しくということです。

酒井さんチョコレート有難うございます。さっき食べました。最近は落が大きく育っています。北海道の友達に落を送ってもらい植えました。会社に持って行って置いたら、やっぱりずっと消えた。じゃあ東京フォーラムにも持っていきこうと思い、そこに置いといたので、持ち帰りたい方はどうぞ。それで、東京フォーラムに持っていきこうと言ったら、女房が「じゃあ宅急便で送る」と言ったが「持っていけるよ」と言い持ってききましたが、やっぱり重たかった。

先ほど小さい子が中齋塾に迷い込んできましたね。いま子供の論語塾というのが、あちこちで広がりました。安岡定子さんが一生懸命やっています。北関東フォーラムに来られている方で、大学を定年退職したから論語塾を開いた。聞いたら8つ増えたって言っていたな。年寄り向け、大人向け、子供向け、学生向け、あと大学の中で。どんどん増やしています。それで色々な子供さん向けの論語塾を見ているけど、あまり小さい子はいない。今回の会場を見ていたら、階段をお母さんが乳母車に乗っけて、それを他の人が支えながら階段をおりてくるのを見て、こんな小さい子も連れてくるのか。赤ん坊ではなくて、とことこと歩くぐらいの子。その小さい子がこの教室に入ってきて、比田井さんがかまっていた。そういう姿を見るのは定子さん関係のとこだけです。他の論語塾はもっと大きい子を連れてきている。

そうか、伊與田覺先生もそのぐらいの歳から論語をしていました。伊與田覺先生は関西方面で論語の普及をされていました。小さい時にお母さんを亡くされた。何か熱中できるものということで周りが論語を教えた。そこらへんが契機で論語にのめり込んでいって、今はもう論語はご飯を食べるのと同じです。人間はご飯を食べるとお腹に入って栄養素に

なってあとは出ていく。論語も、論語を食べないと一日が始まらない。無意識で論語をやっていると空気を吸うようなものなんでしょうね。論語を90年続けるということは、そういうことでしょうかね。やっぱり特殊だと思う。

もうひとつ気になっているものが石川忠久先生です。元号に関して色々なことを新聞が書いています。それで朝日新聞には忠久先生の顔写真も載っていて、官房長官が元号の典拠について書いてあります。令和は初めて国書を典拠にしたことを明かす…ここらへんが駄目だと思う。「一瞬驚いた表情を浮かべ呟いた。やっぱりか」これ読んで、講釈師みてきたような嘘をつきと思った。忠久先生にお会いして「こんなこと言いましたか」って聞いたら「う〜ん」と言っているから、まあ覚えていても言っちゃいけないのだろうなと思い、忠久先生は入院していましたから奥様に確認した。奥様は「朝日の方は病室を出たり入ったりしていたから、テレビのときも多分…」とか言っていたから、じゃあこれはあり得るなと思いますが…。口がもごもごと動いたのだから、そうやって意識したのかもしれないと感じます。

令和に関する物をいくつか、やってみましょうか。東京フォーラムが終わった後に太宰府天満宮に出掛けたことは申しあげました。行ったら「令和」があちこちにありました。もうシールができていて、沢山のお土産に貼ってある。これはかなり経済効果があったなと思います。いま「令和」という漢字について思うことは、どう考えてもただ跪くだけのようではない。令和の「令」という字は、象徴天皇という言葉で表されるように、跪いて寄り添うという意味がでてきている。令和というのは冷たいとか、命令という意味が瞬間的に浮かぶわけけれども、それに跪くが結構広がりました。で、象徴天皇が寄り添うというのがあるから、今後の辞書には寄り添うという言葉をつけ加えるように、ことあるごとに言っていこうと思う。言葉の意味はどんどん変わります。最近は中西進先生が、「美しい」ということを強調しています。それも増えてきています。

今回の元号を決定する経緯みたいなものをちょっと触れておきます。二松学舎関係者が多いから、二松学舎の視点で申しあげておきます。石川忠久先生が二松学舎の学長だった。石川先生は13案あった。そして「万和」という元号案でだした。でも、その中で安倍首相側が喜んだのが「和貴」です。「和をもって貴し」となすから、「和貴でどうでしょうか」と、そしたら「これが一番良いですね」みたいに受け止められた。受け止めた人間は、官邸側の元号を絞り込む作業担当の人。元号の担当者は二松学舎大学院を卒業した尼子さんで官邸側の専門家。それで聞いた人は忠久先生だったり中西進先生だったり。中西先生は、最初は喋りますよと言っていたのが、ぎりぎりになったら話は何もできませんと言ってきた。4月1日は唯識者懇談会があるから決めてないといけない。でも安倍さんは出てきた元号案がどれもこれも気にいらぬ。なぜならば、安倍さんの腹の中にあつたのが、日本の古典から選びたい。それで注文を付けていた。室町時代以前の日本の古典から選べという指示が出ている。そういう物の指示に合わせていったけれど無い。3月27日に官邸側の小さい会議で話を進めていて、仕方がないので、もう一度よいものを選んで貰うように頼め

ということで、中西進先生の所へいく。本当に短期間です。29日には「令和」が出てきて安倍さんに届き、これが良いねとなり4月1日最終案に滑り込んだ。何のことはない。私から見てみると元号は出来レースです。客観的にやっているように見せているだけの話だと私は感じた。ついでに平成の話もしますかね。

平成は安岡正篤先生が考案されたけれども本人が亡くなられていた。でも竹下元総理はその元号で進めたいので、山本達郎先生に「先生の名前で平成を出してくれませんか」と頼んだら、山本先生は了承して先生の名前で提案されていった。それが新聞に、平成という元号には2人の考案者がいて真偽は不明であるということまで新聞には出ていた。この間、たけのこを掘りに嵐山に行ってきました。元号について郷学研修所の荒井桂先生に確認をとったら、各新聞社が気にしているらしくて聞きにきたそうです。荒井先生と話したときに、平成の本当の考案者は誰かをここまで確認に来る。私は当たり障りなく、平成という元号案を安岡先生が出されて、山本先生も同じ案を出された。御二人だされたというのは自然じゃないですか。ということでございました。

平成という元号を考えた二松学舎の視点で見ると、安岡先生は顧問だったな。学長が石川先生。中西進先生も二松学舎で教えていた。官邸側の専門家も二松学舎出身者です。読売が書いたのかな。元号は宇野一家が主軸になっている。宇野哲人先生が初代だけでもって、書き方をしていました。宇野哲人先生は「浩宮」を考案した。宇野精一先生は平成のときの元号案で「正化」を提案した。ということで、いま尼子さんが亡くなったので、その後に入ったのは宇野先生の教え子が、いま官邸側の専門家になったという書き方をしています。見えない所で、表に出る人も裏側に回る人もいっぱい二松学舎っていたねと思っております。

## 《論語の視点》（衛靈公第十五 41）

【四一】師冕 見ゆ。階に及ぶ。子曰く、階なりと。席に及ぶ。子曰く、席なりと。皆座す。子之に告げて曰く、某斯に在り、某斯に在りと。師冕出づ。子張問いて曰く、師と言うの道かと。子曰く、然り、固より師を相くるの道なりと。

「師冕」は目の見えない楽師です。目の見えない人が孔子に会った。湯島聖堂の講堂を想像して、手を引いて先導したかどうかは分かりませんが、どうもそれに近いなと思えます。「そろそろ階段がありますよ」と、孔子が冕さんに言った。それで「また階段になりました。氣をつけてください」と。座っていただく席が近くなって、孔子が「ここが席です。どうぞお座りください」で、弟子達など、そこにいる人はみんな座った。そうすると、孔子は冕さんに「あなたの御存知の誰々さんはここにいます」と。吉良さんはここに座っ

ています。比田井さんはここです。大野さんはあそこに座っていますと、いま名前を出したように、それが「**某斯に在り、某斯に在り**」です。そのうち時間がなくなったので帰りますと晁さんは出ていった。そこから後は、弟子の子張が孔子に聞いて、これは「師」目の見えない方に対しての作法ですかと聞いたら、孔子がそうだよと。もともと「**師を相くるの道なりと**」ということだけ。ここらへんは、目の見えない方には、周りがみんな手伝って助けるのが当たり前だということをお前も覚えておきなさいという内容の会話です。

これを時事評論で現代に置き換えると、障害者というふうには今は言うと思います。障害者に対する思いやりがあると見ればよいと思います。

この間、聖堂で孔子祭がありました。孔子祭の講演会で配られた資料に「宥座の器（ゆうざのき）」が載せてあります。何年か前に季刊誌『知足』の中に、製作者の針生さんの原稿が載っています。この宥座の器を少し説明しますと、こういう器の中が空だと傾くが、ほどよく水が入っていると、きちんと立つ。どんどん水を入れて口切り一杯になると、ひっくり返って全部中身が出てしまう。人間のことを宥座の器で例えているわけです。勉強しなきゃと頑張っているときは下の方だからぐらぐらしているけれど、水が段々溜まってきて徳が溜まり、お金も貯まるのかな。色々なものが出来上がってくると、しっかり腰が落ち着いてくるけれども、俺は成功したなと思い慢心するとひっくり返って全部なし。それが宥座の器。

針生さんが隣に座ったから、以前に季刊誌『知足』に書いていただいて有難うございましたって言ったら、きょとんとしている。それで本人、そうですかどうもと、どうもきちんとした返事しないなと思って、中斎塾フォーラム事務局へ帰って聞いたら「そうですね。あの文章は事務局で書きました」と。前に関根さんという事務局長がいて、インタビューして文章を起こした。だから喋った人は忘れる。

## 《テーマ 元号》

テーマと時事評論で、日本の国自体が劣化をしているという視点で見ます。最初のキーワードで、いま劣化しているものが見えるのは教育界。おもしろいなと思ったのは、読売新聞と朝日と書き方がやはり違う。朝日新聞は論文捏造という言い方をしている。

読売新聞 5月10日東洋英和女学院大学のトップが研究で不正をしたと書かれてあった。今日の新聞の見出しでは「東洋英和 院長を懲戒解雇」としてある。東洋英和女学院の院長で、同女学院大教授の深井智朗さん 54歳。これは、誰々から引用しましたと架空の人間をつくり、その人間が書いたという論文を自分で勝手につくって、それを引用しましたとか、他の研究者が書いた論文を盗用した。黙って使ってしまったということで、何でこんな馬鹿なことをするのかと思います。それは本人に聞かなきゃ理由は分かりません。教育

界ここまで劣化が進んだかというのが一つ。

教育界がそうだったら経済界はどうか。経済は「レオパレス社長引責辞任」とあります。朝日も引責辞任と書いてあるが、朝日の書き方が分かりやすい。これは悪いことした、不正をしたから辞めますという発表です。読売は、会社が儲からなかったから辞めますって書いてある。赤字がべらぼうに増えて経営上の損失を会社に与えたから辞めます。

朝日は道徳的な問題が主で損したものはちょびっと、というふうな書き方をしているから、新聞によって表現は違う。そういうことが段々増えてくるなって感じがします。

これは読売新聞で、政治家の麻生さん。新 1 万円札に関して、今後「論語と算盤」の精神が日本中に広がっていけば、よい会社がたくさんでるでしょうねみたいな書き方を読売がしています。また読売でいうと、なぜ 1 万円札が出来たかという、麻生さんに対するゴマすり。官僚のゴマすりだということが書いてあります。

私は 1 万円札が新しく出てきたことによって、昭和 21 年 2 月 17 日緊急金融措置令が出た。また同じことが起きると何回か繰り返してお話をしていますが、今回はそれを強く感じています。今はキャッシュレスになってきています。澁澤栄一は最後のお札になるのではないかなと思っています。

この間おやっと思ったニュースが、東急の券売機でスマホをかざすとお金が引き出せる。ATM の機能の一部を持たせたということです。ここまで技術は応用されるのだなと思います。ということは、スマホでなんでも決済できるのは当たり前になってくる。今の日本はまだ通貨が必要ですが、そのうち通貨は出てこなくなる前触れだなという感じです。

時事評論で余計なお世話だなと思うのですが、面白いと思ったのが、今日の朝日新聞で「改元に関して検証報道は十分であったか」と。で、そういう自分のところが一番いいと書いている。

「朝日は、ひざを折り市井の人と同じ目の高さで話すスタイルを右派勢力は批判したが多くの国民は歓迎した。日経は、政治や経済を中心とした平成時代を総括することが主題だった。産経新聞は、御代という言葉で、天皇を国民の上に置き、上皇個人というよりも明治以来続く君主としてたたえる立場が透けてみえる」おせっかいな評価だなと思う。産経新聞だけは、確かに御代替わりと書いています。それから、退位とは書いていません。譲位と書いてあります。「読売は、戦後の保守層の主流派の声を代弁するという立場から、皇室も支持している。朝日、毎日、上皇は憲法を守る立場をとってきた点を評価していると、各紙の報道の姿勢について、色々評論をしています」こういうのはちょっと珍しい。ということでこれを面白く読みました。

## 《基本哲学 知足》

知足は、足るを知るという考え方と何度も申しあげています。そうすると今日のテーマの元号に関する事で、氣になった科白がありました。

上皇后様がインタビューでぼろっと言われた。「私も天皇陛下も譲位と申し上げております。それが生前退位という報道に接した時は、大変な衝撃を覚えました」と。なぜ大変な衝撃を美智子様が受けたかと言うと、調べてみたら退位とは「位を退けたもう」と読む。本人は辞める意思がないにもかかわらず、まわりの意志で天皇の位を引きずり降ろされる。これが退位である。そう皇室関係者は受け止めるから、退位という言葉は、あまり使いたくない言葉。うれしくない言葉。皇室の歴史は譲位が続いている。それを今の退位という形は、天皇陛下が亡くなられたらバトンタッチという形で作ったのが伊藤博文。明治時代に伊藤博文が、皇室の仕組みを作りなおした際に天皇は終身である。崩御されたら、即座に新しい天皇が誕生するという仕組みを作り現在まで活着している。そういうことで 202 年ぶりという言葉になってしまったという経緯があります。ですから、「御代替わり」と皇室関係者は言う。たぶん国民にも御代替わりと言ってもらいたいのだろうなと思っています。退位、即位というのは、安倍首相が憲法のことを考えすぎて無理やりこしらえたものだなと感じがします。御代替わりを少し掘ってくと出る。ちなみに日本の歴史の中で淳仁天皇が退位をさせられて淡路島に流されて、後は推測ですが、一服盛られて殺された。そういう経緯がありますから退位という言葉は非常に不吉なイメージを持つわけです。それが今、退位が巷に溢れている。いま中斎塾フォーラムで聞いている人は、退位という言葉はあまり使わない方がよいと思います。御代替わり。譲位または御譲位がいいと思います。皇室の歴史を調べれば出てきます。

御存知のとおり元号は、日本以外にはありません。もともと中国が始まりですけれども、日本だけに生き残っているのは何故か。それは日本の国柄がそういう国柄だからだと思います。日本語は、もう次から次に色々な国の文化を受け入れて咀嚼して、自分の国に合うように形を変えて発展させて、次の世代にいくという物の考え方をします。論語もそういう考えです。論語の一番の基本は「述」だと思っています。「仁」ではございません。述というのは継承するという意味です。受け継いで発展させて、次の世代へ繋げていくというのがベースです。それがあからこそ論語は続いている。自分の考えていることを発展させて、これまでと思ったら次の人にバトンタッチしていった方がよいと思います。バトンタッチするようにお互いが努力できると良いなと思っています。

## 《恒例の質問》

令和になってからでいきましょうか。令和元年以降、まだほんの数日ですけど、  
・良い日が続いている方。良いなと思う日が続いている方。

- ・嘘は比較的ついてない。
- ・有難うと言ひ、有難うと言われる。
- ・健康法をずっと続けている。

私はいつも確認取るのでありますが、夜寝るときに今日はどうだったか。良い日だったかな、嘘ついたかな、有難うと言ったかな、言われたかな。いちいち思い出さないと、無意識でやっているものは分からないです。無意識になれば文句はなし。健康法も無意識のうちにやっていたら良い。

- ・令和になって意識的に自分磨きをしている方。
- ・無意識で自分磨きをしている方。
- ・令和になって、明日以降を過去形でイメージして眠れた方。

## 《紹介書籍》

### 『新版 万葉集 一』伊藤博訳注 角川ソフィア文庫

万葉集は、天皇から一般庶民に至るまでの歌が収められていて、大和言葉による日本最古の歌集でとても良い印象です。ちょっとへその曲がる人は、日本書紀とか古事記は時の権力者が自分たちに都合のいい表の歴史で残している。なので、表の歴史に対して裏の歴史もあるはずだということです。裏の歴史は万葉集に入っている。したがって万葉集を裏側から見ると主張する人たちが結構いる。その言い方が面白くて、歴史の表面に表われない物を読みとる能力がある人には、とても良い本ですという視点で書いてある本です。

先ほどの万葉集の研究家に聞いたら、和歌は自分の思いを素直に表現するものなので、時の権力者に殺されないように自分の思いも残しているということです。ただ気をつけなきゃいかんと思ったのは、和歌は創作だということです。事実とフィクションが混ざり合うから歌になるという。大和言葉で書いている和歌は、創作ということを前提において見ないと、怖い。その万葉集を裏側から見る場合は、願望や創作が入っている。尚且つ事実も入っているという見方をしないと怖いなと思いました。

天皇が詠まれる歌を御製（ぎよせい）と言ひ、皇后陛下が詠まれる歌を御歌（みうた）と言ひます。天皇が漢詩をするときも、天皇御製とか上皇御製と言ひますが、皇后陛下が漢詩をするときには言ひません。ということで、和歌だから、天皇皇后両陛下の御歌の中で良いと思うのがいくつかありましたので御紹介いたします。

阪神淡路大震災の被災地について、皇后陛下が詠まれた「この年の春燈かなし被災地に雛なき節句めぐり来たりて」

もうひとつ。東日本大震災で家族を失った4歳の少女が手紙をノートに書いてうつぶせて眠った写真が新聞に掲載されたのを見て「<生きているといいねママおげんきですか>文に項傾し幼児眠る」項傾（うなかぶ）して、こう耳を傾けた。それは耳というより項垂れる感じかな。

平成19年に天皇陛下がラトビアに訪問されて「シベリアの凍てつく土地にとらはれし我が戦人ともかく過ぎしけむ」

天皇皇后両陛下が被災地をまわられて、いろいろなものを詠む。そのときに新聞は統計の数字で何万何千人が亡くなりましたと書く。天皇皇后両陛下の場合は、統計数字で見ないで、常に一人。この人が、幼子かと、一対一の関係で和歌を詠んでおられるという解説を読み、なるほどなと思いました。

令和という元号を見て、時代は変わったな。私もこうしなきゃならんと思う。こういうチャンスを与えてくれたということは、とても良いことだと思います。ただ考えるときに、日本人は感情でかなり動かされるから、天皇陛下が御高齢になり、全身全霊で天皇の務めを果たすことができなくなりつつあるということを言われた。これは練りに練った文章だと思います。御一人で考えられたわけではないと感ずます。ということは、憲法論議に火をつける。それから今年の2月にエリザベス女王は93歳。イギリスも、譲位を検討始めたという記事もあります。世界各地に皇室またはそれに値するような方々がいる国に相当な影響を与えましたね。世界の視点と、日本の国柄をみる上の視点で、元号を考えると良いと思います。それに対して深く考える。憲法学者も深く考えざるを得なくなった。共産党もお祝いの言葉を出したし、大変なことですよ。上皇陛下が天皇に即位された時は、皇居に向かって14発も迫撃弾みたいなものが飛んだ。ゲリラが40ヵ所あちこちで動いていた。今回は皆無とは言わないけれども、とても少ない。そういう雰囲気させたのは、日本人達の感情に火をつけたからだと感じます。御高齢になり自分でも動けない。まわりの人も動けないということが言える。それと、象徴天皇の務めを全身全霊をもってあたりますというのは言える。でも、全身全霊をもって仕事をしてきましたということは、言えない。

ということは、今回の元号の令和という言葉は、全身全霊をもって仕事に向き合っているか。全身全霊をもって人と対しているか。全身全霊をもって仕事に取り組んでいるかという質問。問いを投げかけている。日本という国はこれでよいのか。日本の国民はこれでよいのか。各国も、その体制でよいのかと、いろいろな物を含めて問いを全体に発しているなということを感じました。どうぞ、お一人お一人お考えいただくとよいかと思います。有難うございました。